

Raffine Journal vol.26

憧れが、輪郭を消すとき

似ている、と言われる。

けれどそこに立っているのは、
その人ではない気がする。

近づいているはずなのに、
輪郭だけが、遠ざかっていく。

ある表現者が、
憧れている人の名前を挙げていた。

その人の表現は、確かに似ている。
声の使い方や、間の取り方、
細部のニュアンスまで、どこか既視感があった。

けれど印象として残ったのは、
その人自身ではなかった。

見ているはずなのに、
浮かび上がってくるのは、
憧れの人の方だった。

似ている、というよりも、
重なってしまっている。

その違和感だけが、静かに残った。

人は、何かに影響を受けながら表現する。

それ自体は自然なことだと思う。
むしろ、何にも影響を受けていない表現の方が、
不自然に見えることもある。

似ていることは問題ではない。
それでも、見えなくなる瞬間がある。

その人を見ているはずなのに、
別の誰かの像が重なる瞬間がある。

似ている、ではなく、
重なってしまっている。

そのとき、
その人の輪郭は、少しずつ曖昧になる。

誰を見ているのか、
わからなくなる。

似ていることが問題ではない。

問題は、
なろうとしていることなのかもしれない。

何かになろうとした瞬間、
その人の形は、後ろに退く。

人は、何かになろうとした瞬間、
自分ではなくなる。

存在は、自分の内側から立ち上がるものではなく、
参照した像で満たされる。

そのとき表現は、
その人のものではなくなる。

似ているのに、
本人が見えなくなるのは、
すでにそこに「その人」がいないからだ。

輪郭は、重ねてつくられるものではない。

削がれていく中で、
最後まで残ったものだけが、
そのまま形になる。

なぞった瞬間、
その人はいなくなる。

R.

Raffiné Journal vol.26
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné